

## 『県庁おもてなし課』

有川浩著／角川書店

本書の舞台は高知である。実際に高知県にはおもてなし課があるのだが、この小説は架空の話である。県庁の観光部に新しくできた「おもてなし課」に所属する主人公が発案して「観光特使」の制度をつくったことから端を発して話が進む。最初は、型にはまったお役所仕事の連続が、民間人の発想と行動力に感化されて、徐々に変わっていく。観光特使の1人に任命された東京在住の作家、県庁を早期退職して民宿を営みながら観光コンサルタントをする人物、この2人がおもてなし課に化学変化を少しずつおこし、高知県の自然を使った観光企画を目指して、県庁体質に挑んでいくという話である。県庁体質から少しずつ脱して、民間を巻き込んだ企画を進めていくということで、ある意味ではサクセスストーリーである。

私の仕事柄、自治体（都道府県、市町村）の職員と付き合うことが多い。彼らは個人としては非常に優秀で熱心でありながら、組織としては、確かに融通の利かない「お役所」としての性格が前面に出ることが多々ある。この小説は、まさにそういった状況を、著者特有の軽い文体で愉快に展開していく。アルバイトで助手として雇った若い女性との恋愛、主人公が師匠と仰ぐ作家との関係、県庁から放逐されたも同様でありながら県庁に協力する観光コンサルタントとその娘そして作家の関係など、伏線も豊かである。

公務員を目指す人はぜひ、読んで欲しいし、地域興し・活性化、町おこし、などに興味がある人も非常に楽しめる内容である。「お役所は民間と比べてぬるい」「県庁ルールという民間感覚でみると時間の無駄遣い」といった、かなり、型にはまった示し方は、上述のように、個人としての公務員の熱意を逆撫でしそうではあるが。実在する高知県おもてなし課は少ないスタッフで、高知県の観光を真剣にプロデュースしているのだよ。2011年に出版された本で読んだ中では、軽いのりで読めるが内容は深いものを持つ好著であり、若い感性をもつ者が、社会という手垢にまみれた世界にもまれる前に読むと良いと思う。

他にお勧めできる有川浩の本

- ・ 阪急電車 阪急今津線の8つの駅を舞台に乗客が繰り広げる様々なエピソード
- ・ 図書館戦争シリーズ 架空の法律が施行された世界を描くライトノベル

---

## 執筆 者 紹 介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画 地区計画）。

---

| 『書名』        | 著者名  | 翻訳者名 | 出版社または文庫・シリーズ名 | 出版年   | 税込価格   |
|-------------|------|------|----------------|-------|--------|
| 『県庁おもてなし課』  | 有川浩著 |      | 角川書店           | 2011年 | 1,680円 |
| 『阪急電車』      | 有川浩著 | 幻冬舎  | （幻冬舎文庫）        | 2010年 | 560円   |
| 『図書館戦争』     | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 700円   |
| 『図書館内乱』     | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 700円   |
| 『図書館危機』     | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 700円   |
| 『図書館革命』     | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 700円   |
| 『別冊図書館戦争 1』 | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 660円   |
| 『別冊図書館戦争 2』 | 有川浩著 |      | 角川書店（角川文庫）     | 2011年 | 660円   |

[ブックガイド目次へ](#)